

## 第1節 学会誌の変遷

### 日本鳥学会誌の変遷

鶴見みや古（山階鳥類研究所自然誌研究室）

はじめに

日本鳥学会が創立されたのは1912年（明治45年）であるが、学会誌が創刊されたのは3年後の1915年（大正4年）である。黒田長久（1962）は、学会創立50周年記念誌のなかで「日本鳥学の黎明は明治の終わりであったから、他の科学部門と同じく欧米鳥学が日本に入りはじめ、本草研究から近代研究に切りかえられた。当時の鳥学は種類の解明という基礎的分類学の段階にあったから、日本鳥類の分類、分布の研究から着手され、着々と成果が上げられ欧米と肩を並べるようになり、「鳥」も世界5大誌に数えられた<sup>注)</sup>。」と記している。また、日本鳥学会創設者の一人、黒田長禮（1962）も学会創立50周年を記念する文章の中で、「日本の鳥の研究も過去50年の間には全く驚くほどの進歩発達を遂げたといえる。はじめわれわれがやりだした頃は鳥のことなど一般の人々は全く何も知らず、知ろうともせず、なんだ鳥の研究と一口に蔑まれてしまっていた。それが段々にわれわれのもつ鳥の知識をたよっているいろいろの話（たとえば渡り鳥の話、食物に関する話、地方的鳥の種類のことなど）を聞きにきたり、また書かされたりするようになった（後略）」と鳥学会創設時か

らの50年を振り返って記している。ここに至るまでには太平洋戦争の影響による約3年間の休刊という会にとっての一大事もあった。学会誌は時代に応じて誌名、発行回数、発行スタイルの変更をしつつも、文字を媒体とした研究発表の場、学会員の交流の場として今日まで営々として発行されてきた。2012年、学会発足100年を迎えるにあたり、いわば学会の顔ともいえる学会誌がどのように誕生し、100年の歴史の中でどのように変わってきたのか、ここでは学会の歴史を四つの時期に分け、日本鳥学の発達を、学会誌の掲載内容と体裁に視点をおいてここに振り返る。

注)

世界5大誌が何であるかの記述はこの文献に記していない。しかし、他の文献のなかで、3大誌として、*Journal für Ornithologie*, *Ibis*, *Auk* を挙げている（黒田1958）。

#### 参考文献

- 黒田長久（1958）鳥類雑誌便覧。読書春秋9(3): 14-16, 29.  
 黒田長久（1962）日本鳥学将来の希望。鳥17(79/80): 37-40.  
 黒田長禮（1962）創立50周年を迎えた日本鳥学会。動物系統分類学月報4: 1-2.

### 学会誌発行の経緯

鶴見みや古（山階鳥類研究所自然誌研究室）・中村 司（山梨大学名誉教授）

日本鳥学会は、1912年（明治45年）東京帝国大学教授飯島魁、内田清之助、黒田長禮らによって創立されたが、学会誌「鳥」（*Tori*）が創刊されたのは3年後の1915年（大正4年）である。なぜ、会誌発行を3年間行わなかったかについての理由を記したものを見つけることはできなかったが、黒田長禮は、学会創立50周年記念誌（1962年）および「鳥」100号（1976年）のなかで、「飯島会頭はすこぶる磊落で当意即妙に富んだ方であったが、細心の注意を忘れない方であったから、

たとえ会はできても会合、会食、雑談または講演程度で、互いに鳥談を交えて知識を交換し、時に会誌を出す話があっても会頭はなかなかこれを許されなかった。それゆえようやく機が熟して会誌が出たのは大正4年（1915）のことであった。そしてその会誌の名は会頭自らの発意で、簡単明瞭な「鳥」が選ばれたのであった。」と記している。また、飯島（1915）は「鳥」第1巻第1号の冒頭、「本邦鳥類ノ研究ニ就キテ」のなかで、発刊の意義について、「今までのところ、日本の鳥類の研究は

分類学では業績を上げているが、生態の研究（例えば、渡り鳥の去来、繁殖の観察、分布、食性など）は閑却されていた。今後日本の鳥学は、是非、生態学的方面ならびに応用的方面に向かって大いに発展する必要がある。これらの研究が進めば日本の鳥学はさらに発展するであろう」という言葉を記している。学会誌創刊を決断した理由のひとつには、これらの研究の発展、研究者の育成があったのではないかと推測する。以上が学会誌発行の経緯であるが、ここに至るまでの日本の鳥学がどのようなかたちで発展してきたのかを振り返ってみたい。黒田（禮）（1927）は、「日本鳥学発達史」の中で、日本の鳥類に関する文献について「明治維新前迄は何づれも単に諸侯の命により鳥類を集め又は鳴聲や奇形のもの愛玩したもの或は飼鳥として飼養したもの等が大部分を占めて居た。」と記すとともに、1800年代から1927年までの間に発表された日本の鳥類に関する文献約460編を紹介している。これらの文献には、論文だけでなく、報告的なものも数多く見られるが、1915年に日本鳥学会誌が刊行されるまで、日本における鳥類に関する文献のほとんどは1888年に創刊された日本動物学会の「動物学雑誌」に掲載されていたといっても過言ではない。さらに黒田は前述の報文の中で、日本鳥学会誌「鳥」が創刊される前年の1914年までに著わされた鳥類に関する論文や単行図書として約170を数えているが、こ

のうち約100編の論文・記事は「動物学雑誌」に掲載されている。その他の文献は、The Birds of the Japanese Empire (H. Seebohm 1890)、保護鳥図譜（飯島魁 1898）、日本鳥類図説 上・下（内田清之助 1913, 1914）などの単行図書、Ibis など外国の雑誌に外国人が発表した日本の鳥についての論文である。因みに、動物学雑誌が発行される前年の1887年までに著された文献として黒田（1927）は約50の文献を挙げているが、これらすべてはC. J. Temminck, T. W. Blakiston, H. Seebohm, L. Stejnegerら外国人研究者によるもので、日本産鳥類の記載、分類、分布に関する論文など重要なものを多数含んでいる。なお、「鳥」創刊以降、鳥類の論文は「鳥」と「動物学雑誌」のほか、日本動物学会発行の「日本動物学彙報」など数誌のなかにみることができる。1915年の「鳥」創刊以降、1927年までの「鳥」への論文掲載数は約80編、「動物学雑誌」へは約100編とこの2誌にほぼ二分されている。さらに、翌1928年に日本生物地理学会が創設され会誌が発刊されると、鳥類に関する論文発表の場はさらに広がっていくことになる。

#### 参考文献

- 飯島 魁 (1915) 本邦鳥類ノ研究ニ就キテ. 鳥 1(1): 1-2.  
 黒田長禮 (1927) 日本鳥学発達史. 自然科学 2(2): 2-57.  
 黒田長禮 (1962) 創立50周年を迎えて. 鳥 17(79/80): 1-2.  
 黒田長禮 (1976) 「鳥」第100号出版についての回顧録. 鳥 25(100): 63-64.

## 学会誌掲載論文の変遷

濱尾章二（国立科学博物館動物研究部）

創刊から戦争による休刊まで〔第1巻, 1915年（大正4年）～11巻, 1944年（昭和19年）〕

初代会頭の飯島魁は学会誌発行にあたり、基礎的な生態情報の投稿を呼びかけた。生物学自体が現在の形をなしていなかったこの時期、鳥学も本草学の延長から博物学への歩みを始めたところであり、そのような情報の蓄積は当面の重要事であったろう。掲載論文を見ると、地域の鳥類相や新分布を報じる論文が多く見られる。中には今日ではあまりない形態の地理変異を扱った論文や飼育法の記録、狩猟についての文章もある。少人数の学会であるため著者は比較的限られており、

会頭を務めた内田清之助、鷹司信輔、黒田長禮をはじめ初山徳太郎など初期の学会で力を尽くした人たちが多く、しかし、アクティビティは高く、雑集・講話というカテゴリーに分類された文章を含めると年平均24.2編が収録されている。

論文の内容は必ずしも、基礎的生態の断片的な報告ばかりではなかった。伊豆諸島で多種多個体の胃内容物を精査した山階芳麿の食性論文（1941, 11巻51/52号）、一地方のものながらさえずり・繁殖開始時期を長年記録した兼常彌富の論文（1920, 2巻9号）など、今日でも引用可能な貴重な資料である。托卵の排除を想定したオオヨシキリの卵